

平成 29 年 3 月 11 日

災害は忘れたころにやってくる！

～ 平成 23 年 3 月 11 日（金）14 時 46 分を忘れない ～

大和高等学校長 林 忠

6 年前、宮城県沖を震源とする M9 の大地震「東日本大震災」が発生した時、私は県教育委員会（横浜市中区日本大通 33）5 階の会議室で、（当時の）藤井教育長以下 30 名弱の幹部職員全員が集まる「部課長会議」中であった。

大きな揺れに驚くとともに、速やかに会議机の下に身を隠したが、たまたま窓際に席があったため、日本大通の銀杏の大き木が揺れる様子や隣のビルの大きなガラス窓がフロアにあった書棚が倒れることで粉々に割れていく様子を、何かスローモーションの映像を見るような感覚で眺めていたように記憶している。割れたガラスが通りにゆっくり降下していく光景が今でも脳に残っている。（当時、その割れたガラスが通行人に当たって怪我をしたというニュースは聞かされていない。）

話は変わって、私は 25 歳から 45 歳までの 20 年間、（地元である）小田原市の消防団員でした。班長も 2 年間経験し、地域の防災・減災意識を高めるために域内限定の「消防新聞」の発行などにも中心となって取り組んでいました。

未明の早朝電話で「〇〇付近で火事発生、出動せよ」と起こされ、寝ぼけ眼で着替え現場へ行って見れば、材木店からの出火で、既に市の消防職員や他班の団員も消火活動に従事していたという体験もあります。この時は、防火水槽が近くに無く、国道の真下にあった消火栓から（ポンプを発動することなく）直結で水を得て放水したことを記憶しています。

また、この火事ではありませんでしたが、20 年も団員活動をしていると、火事で家財一式を消失するだけでなく、尊い命を失ってしまった火災現場へ出動した経験もあります。

なお、小田原市では当時から東海地震や神奈川県西部地震対策の一環として、地域の消防団員を活用するため、“火を消す”消火訓練はもとより、地震災害発生後の人命救助のための様々な救護訓練、例えば、心配蘇生法の資格取得、倒壊家屋から救助するために電動チェーンソーや電動カッターの使用方法講習会、避難所の設営などが行われており、そうした訓練は、まさに大規模地震をイメージしたものでした。

話を戻しましょう。

未曾有の東日本大震災では、直後から国内外を通じて大きな復興支援のエネルギーが被災地に集まるようになったわけですが、「自分でも出来ることは無いだろうか？」といろいろ考えました。

その結果は、現地に赴きそこで買い物等をする事で地域経済に少しでも役立てば、という行動を継続していくこととし、隔年の夏休みに妻と二人で被災地・復興現場を視察する旅を続けています。

毎回 2 泊 3 日の旅行プランで、金額的には微々たるものですが、自分なりの復興支援“策”として、つまらないルールですが、一応ある決め事（ルール）で行動しています。

そのルールとは、全国チェーンの店舗等（例えば、ローソンや庄や、東横インなど）は基本的に利用せず、地元の個人経営店を可能な限り利用するという事です。

宮城県石巻市の石巻駅前のロータリーの東端に「観光物産情報センター」がありその建物を通り過ぎて脇道へ入ってほんの数分のところに、「中国飯店萬里（ばんり）」という中華料理店があります。お世辞にも綺麗じゃないし、う～んどうしようかな？と一瞬考えてしまう程、田舎くさい雰囲気一杯のお店です。看板には“安い うまい ボリューム満点”とあり、私は必ず麻婆麵（マーボーメン）を注文しています。とても美味で最高です！

またまた話はそれますが、ここ石巻市には、宮城県出身の漫画家・石ノ森章太郎の記念館（マンガミュージアム）である「石ノ森萬画館」があります。代表作には『サイボーグ 009』、『リュウの道』、『仮面ライダー』



などがあり、思わず少年時代へタイムスリップしてしまいます。（私も、仮面ライダーの隣で記念撮影をしてみました。）

なお、石巻駅前の中心市街地・商店街周辺には、いたるところに石ノ森章太郎さんの代表作品のキャラクターが等身大で設置されています。特に、『サイボーグ 009』の 001 から 009 まで探して歩くのも、また楽しい旅路となるでしょう。



「奇跡の一本松」で有名な高田松原は、350 年にわたって植林されてきた約 7 万本の松の木が茂り、陸中海岸国立公園（現三陸復興国立公園）や日本百景にも指定されていた景勝地でありましたが、東日本大震災による津波の直撃を受け、ほとんどの松の木がなぎ倒されて壊滅しました。

この「奇跡の一本松」がある陸前高田市では、海岸線の中心地は広範囲に大きく地盤沈下したため、隣接する西側の山を一つ切り開いてその土砂で土地のかさ上げを行い、その上に新しい商店街や公共施設を建てるようですが、海岸線に別れをして、国道 45 号線をさらに北上し始めたたん、左手に見えるのが震災直後から、複数の地元店舗が同居するテナントが見えてきます。ここに「四海楼（しかいろう）」という中華料理店がありますが、これもまた最高に美味しいラーメンを提供してくれます。人気店で、いつも混雑していますし、プロや芸能人などの著名人が何人も訪れていて、店内には沢山の色紙が飾られています。（サッカーのドルトムントに籍がある香川真司選手、俳優・歌手の中村雅俊さん etc・・・）

なお、この店は、エアコンがついてないので、着替えが必要になるくらい夏場は汗をかきながら食することになります。（そろそろエアコン入ったかな？）

安いラーメンばかりでどうやって復興支援になるんだ、と若干呆れ顔の読者も増えてきたようなので、そこは少しフォローさせてもらいますが、宿泊にはペンションや地域密着型のホテルを利用したり、毎回、中尊寺金色堂の拝観料を支払い、そして浦霞酒造元の（株）佐浦へ立ち寄り、銘酒を大量購入するなど、自分なりの支援を行っています。（笑）

※ 五月雨の降り残してや光堂（by 松尾芭蕉）

ここから先は、激甚災害といわれた東日本大震災からの復興を祈りながら、いまなお遅々として進まない復興の部分やようやくここまできたかという現地の状況、そして何より、忘れてはならない未来への教訓として、一人ひとりの心に刻むべきことについて少し述べておきたいと思います。

(陸前高田市) 気仙中学校は、前述の「奇跡の一本松」で有名な海岸線にほど近い場所に位置していたため、津波で校舎が被災、生徒の約8割は自宅を失ったと言われていました。大津波警報が発令された後の対応が素晴らしく、全校生徒、教職員が避難し、全員無事でした。

なお、津波は校舎最上階まで達し、体育館を含め、全壊しました。(この校舎の屋上まで津波が到達した証拠として、屋上の看板には、津波到達の地上高 14.2mと記されています。)



被災した海岸線を車で走っていると、「過去の津波浸水区間 ここまで」という大きな看板が、いたるところに林立しています。海岸線から一定距離離れた内陸部にもこうした看板が道路際にあり、「こんな所にまで津波が押し寄せたのか?!」「ちょっとした地形の違いで浸水するしないといった運・不運があったんだろうな〜」と当時のことが思い出されます。「過去の津波浸水区間 ここまで」という看板が、時の経過で風化する大震災への動かぬ証として、これからも通行人に警鐘を鳴らしていくのでしょう。

先ほど、14.2mという想像できないほどの高さで押し寄せた津波、この津波への備えとして、各地で防潮堤の建設がまさにラッシュ状態となっています。



左の写真は、海岸線の漁港近くの新設された防潮堤ですが、真横から見て扉(□で囲まれた部分)が分かるでしょうか。

比較する物がないのでピンと来ないかもしれませんが、この可動式の扉の高さは7m近くあります。とても大きな構造物です。



陸前高田の海岸線の防潮堤は、海岸沿いの第一線堤とその約100m内側の第二線堤が計画されていますが、第二線堤の高さは、震災前の5.5mに対して12.5mと2倍以上の高さとなります。堤防の長さは約2kmととてもつもない大きな構造物です。遠くから見ても、大きなクレーンが何台も動いている、大工事であることが一目瞭然でありました。



大川小学校の悲劇、というフレーズを聞いたことがある人は多いのではないのでしょうか。全校児童108人のうち生存者はわずか34人という、石巻市立大川小学校の悲劇は、教育現場を襲った災害として歴史に深く刻みこまれることになりました。北上川流域にある学校で、川までの距離は少しあったのですが…。



今現在も無残な姿を残していますが、鉄筋がむき出しになり、二階の橋が崩れ落ち、壁が粉々になるなど、津波の破壊力の大きさを証明しています。この学校は、北上川の直ぐそばに位置していましたが、同時に、学校の校庭から遠くない所に大きな裏山が構えていたのです。(写真のバックに見えるのがその裏山である。)なぜ、裏山に逃げなかったのか?と当時、随分言われていましたが…。

今現在も無残な姿を残していますが、鉄筋がむき出しになり、二階の橋が崩れ落ち、壁が粉々になるなど、津波の破壊力の大きさを証明しています。

この学校は、北上川の直ぐそばに位置して



人は苦しいとき、悲しいとき、無力感に浸るときなど、自然の造形に何か新たな力を注いでもらえるよう、祈りの対象とすることがあります。

気仙沼市の岩井崎には、「龍の松」と呼ばれる木が海岸ギリギリにたっています。この岩井崎周辺も17mの津波が押し寄せ、多くの方が犠牲となり植樹も波にさらわれたようです。そんな災害の後に力強く残っていた松は、津波に立ち向かう龍のようであったことから、こうしたネーミングとなったようです。海水による傷みが激しく一時は枯死状態となりましたが、復興のシンボルとして長く保存する為の加工が施され、現在に至っています。



今の私たちには、当時の被災地の実情や窮状の本当のところは分からない部分が多いわけですが、津波災害に限らず、昨年暮れの12月22日昼前に発生し、翌日の夕方鎮火まで約150棟の消失となった糸魚川市大規模火災など、「災害は忘れたころにやってくる!」ことだけは事実のようです。そうした災害への備えを如何にするか、それは我々の知恵の出どころです。

大規模地震が発生した場合、家族の一人ひとりがどこで一時避難するのか?自宅の防災備蓄は定期的に更新し、もしもに備えられているか?また備品は数日間生活するために十分といえるか?

周囲が助けてくれないことに不満を言う前に、自分で出来ることをする。しようとする。はじめの一步は、自らの意思で、起こしたいもの。